

芝浦工業大学 2012年度大学外部評価委員会の総括

2013年5月27日
芝浦工業大学外部評価委員会

はじめに

2012年度大学外部評価にあたっては、過去2回と同様に、大学が作成した自己点検・評価書に基づき、5名の外部評価委員が事前に書面による評価を行った後、2013年2月25日に、全外部評価委員と村上学長をはじめ副学長、各学部長・研究科長、事務局長等学内関係者が出席し、委員会を開催した。本総括は、同委員会の議事録及び5名の外部評価委員が事前に提出した所見に基づき、評価の結果をとりまとめたものである。

近年、大学を巡り様々な議論が展開されていることは周知のとおりである。昨年は6月に大学改革実行プラン、8月には中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」が示され、本年に入ってから、経済財政諮問会議、産業競争力会議、教育再生実行会議などで大学教育を巡る問題が盛んに議論されている。

これらのことが意味するのは、大学に対するこれまでも増した期待であり、変わりきれない大学に対する苛立ちと解することもできる。グローバル化により社会の変化の速度が増すと同時に、解決を迫られている課題の難易度が高まる中、人材の育成や新たな知の創出に対する期待がこれまで以上に強まっている。その一方で、大学が社会の変化に対応できていない、大学には旧態依然たる体質が残り、本質的・構造的問題は解決されていないといった見方も根強い。

このような見方の一方で、大学は決して立ち止まっている訳ではなく、多くの大学において意欲的な取り組みや様々な改善が進みつつあることも事実である。これらの活動を含めて、それぞれの大学や学部・研究科等がいかなる理念に基づき、何を目標とし、どのような施策を展開したか、その成果がどう得られ、どのような課題が残ったかを明確化し、広く学内で共有することで改革を加速させ、改善を定着させることが自己点検・評価の目的である。同時に、これらのプロセスや点検・評価の結果を広く学外に公開することで、大学運営を社会の目を通して規律付け、社会の信頼を高めていくことも自己点検・評価のもう一つの大きな目的である。

本学が、学長のリーダーシップのもと、チャレンジSIT 90作戦を展開するなど意欲的な取り組みを行っており、それと並行して、大学を挙げて自己点検・評価に本格的に取り組んでいることは、大いに評価されるべきであろう。ただ、自己点検・評価報告書を見る限り、報告書作成自体が自己目的化するなど評価のための評価にとどまっている印象が否めなかった。膨大な分量の報告書から何を読み解くか、5人の外部評価委員はそれぞれに苦勞し、そのことが委員会冒頭の厳しい指摘につながったものと思われる。また、報告書が大学基準協

会の大学認証評価基準に準拠して作成されているために、教育面に偏り、研究活動に関する記述がほとんどなかったこと、男女共同参画が大きな社会的要請であるにも拘らず、学生数や教職員数などに男女内訳が記載されていないことなども、今年度の報告書作成にあたって必ず改善を行ってほしい課題である。

報告書作成や評価委員会の準備等に携わった教職員の負担も極めて大きいものと思われる。いわゆる評価疲れという現象は、国公立を問わず多くの大学に見られることであるが、世界水準の工学教育を掲げる本学であればこそ、その名に相応しい、実効性と効率性を最大限に高めた自己点検・評価システムを追求し、評価を大学改革の加速と改善活動の定着に着実につなげて行ってほしいと期待するものである。今回の評価がその一助となれば幸いである。

第1章 理念・目的

- (1) 「社会に学び社会に貢献する技術者の育成」という建学の精神に基づき、新学長のもとで、「世界に学び、世界に貢献する理工学人材の育成」を目指して、「チャレンジSIT-90作戦」に引き続き注力するとの方針を明確化し、教員、職員、学生が一体となって実施する大学改革運動を強力に推進している。創立90周年、さらには100周年にむけてという意欲が十分に伝わってくる。教育の質保証、大学の国際化、人間形成、学生の満足度向上、SITブランド向上等について、第2ステージの取り組みを具体化するための工程表（ロードマップ）を示してほしい。
- (2) 同作戦の中で、過去3か年にわたり8つの柱からなるグローバル戦略に取り組み、2012年度の文部科学省グローバル人材育成推進事業（タイプB：特色型）に採択されている。また、留学生3%計画やその具体化のための国際学生寮の開設などは評価に値する。
- (3) 他大学が総じて受験生を減らす中、今年度は3万6千人を超える受験生を確保している。また、実践型人材育成の理念通り、卒業生の活躍によって高い評価を受けており、高い就職率や就職実績を示している。これらの実績については高く評価されている。
- (4) 工学部は教育目的と5つの目標を、システム理工学部は理念とシステム思考、システム手法、システムマネジメントの3つの軸を、デザイン工学部は教育理念と教育研究上の目的を、それぞれ明確にしている。その一方で、それらの実現を目指す体制において、どのようにPDCAを回し、どのように可視化を図っているのか、その仕組みが明確には伝わってこない。学生に周知徹底されたか否かの検証を行うにあたり、Webサイトのアクセス解析が適切なのかどうか検討の必要がある。
- (5) 理工学研究科と工学研究マネジメント研究科の両大学院研究科もそれぞれに理念・目的を明確化しているが、報告書上からは学部ほど明確に理念・目的や特色が読み取れず、そのことが志願者数の伸び悩みにも繋がっているのではないかと危惧している。
- (6) 自己点検・評価への姿勢に当初の緊張感がなくなっているのではないかの懸念を感じる。報告書の分量や内容が各部門にまちまちであり、統一性がなく読みにくい。

大学共通の教育理念・目標があり、その下に各学部・学科の理念・目的があるというように階層化すべき。また、学部や研究科ごとに、理念、目的、目標など用語が不統一な点は今後再検討する必要がある。理念と目的と目標はそれぞれに異なる概念であり、理念または目的を最上位にして、目標、計画と具体展開していくことが望ましく、その構造が大学全体及び学部・研究科ごとに可視化されていることが重要である。

- (7) 大学のグローバル化は喫緊の課題だが、グローバル化とダイバーシティは切り離せない。そのような方針を明確にし、男女共同参画をはじめとするダイバーシティに強力に取り組んでほしい。そのための取り組みとその推進状況を報告書にも記載すべき。女子学生の受け入れ増大や女性研究者比率の向上などを実現するためには、ハラスメントなどのリスク面の対策は当然のこととし、さらに女子学生が学びやすい環境、女性研究者が研究に専念しやすい環境の整備に計画的に取り組んでほしい。ダイバーシティや男女共同参画に対する取り組み姿勢をより明確化し、具体的な施策を明示して計画的に推進する必要がある。
- (8) 学部と大学院が連携した5年または6年一貫教育を打ち出せないか検討いただきたい。

第2章 教育内容・方法・成果

- (1) 3学部・2研究科とも教育目標を定め、それに基づき、教育の質の向上に向けたきめ細やかな取り組みを展開していることは高く評価できる。積極的に評価したい主な点は以下の通り。
- ・ 3学部とも、各学部を特色づける内容が簡潔かつ分かり易く示されたディプロマポリシーを公表しており、それに基づき、教育目標の明確化とカリキュラムの体系化を行っている。
 - ・ 特に、報告書ではデザイン工学部の教育課程が学外者にも理解しやすく示されている。
 - ・ 3学部とも入学時にプレイスメントテストを実施し、学力に応じてきめ細やかな教育が行えるような仕組みを整えている。工学部においては基礎科目の欠席者に対して、システム理工学部においては高校時代の理数科目成績不良者に対して、それぞれ特別のケアをしていることは評価したい。
- (2) その一方で、学部・研究科ごとの記載がばらばらであり精粗の開きが大きい。また、報告書からは、教育に関する大学全体と学部・研究科の役割・責任分担が分からず、学部・研究科任せになっているのではないかと印象も拭えない。また、学部と学科の役割・責任分担も分かりにくく、システム理工学部やデザイン工学部に比べ、工学部においては学科任せになっている面もあるのではないかと印象を受ける。学科が自律的に教育責任を担うことは望ましいことだが、その上で、学部はいかなる責任を負うのか、学部と大学の役割・責任関係はどうあるべきかを十分に議論した上で、その関係を明示できるように努めることが望ましい。

- (3) 学生による授業評価アンケートや教育評価アンケートなど、検証や改善に繋げるための多面的な取り組みを行っている。一方で、授業アンケートの結果がどのように利用されているのか、教育イノベーション推進センターの機能がどう活かされているのかは不明確である。これらのアンケートは学生全体の傾向を示すものだが、個々の学生が入学から卒業までどのように学修し、どのような知識・能力を獲得していったかなどをトレースするような調査が必要との認識も広がりつつあることから、そのような視点での検討も期待したい。また、適切性の検証により客観性をもたせるため、状況が許せば卒業時に一斉試験等を行って定量的で明確性をもつ評価を行うことも一案であろう。
- (4) 工学部4学科の JABEE 認定と気づき調査の取り組みや日本語能力向上への配慮、システム理工学部における単位制限や GPA の導入などは、それぞれの長所と短所に留意しながら、持続的に追跡調査する必要がある。特に GPA について、学生はポイントの維持・向上のみに関心が向き、幅広い科目履修を避ける傾向が生じることに留意する必要がある。また、大学院における副専攻プログラムでは徒に学生の履修及び学力・学識の修得が散漫とならないよう配慮する必要がある。核となる専門性や基礎的素養と学力あつての総合性、創造性、国際性であることを留意いただきたい。
- (5) 学生満足度の結果によれば、学部生においてコミュニケーション能力の向上、自発性の向上が他の項目より低いと、これらはソーシャルキャピタル、すなわち自発的社交性という概念で示される能力の欠如を物語っており、それらが本学の弱点であるとすればそれを克服するための取り組みが必要ではなからうか。
- (6) 成績評価の適正化・統一化という課題は毎年のように記載されている。学部・学科、研究科・専攻ごとに見ていくと卒業率などに違いがあるケースもある。成績評価を相対化するなどして改善に取り組んでいただきたい。
- (7) 「芝浦工業大学通論」が工学部のみの開講となっているが、全学的に開講することを考えてもよいのではないか。
- (8) 工学マネジメント研究科については、多忙な社会人学生が履修しやすいように、授業料は同額の3年制コースを認めるなど、社会人のニーズに適合した制度・カリキュラムなどを検討する必要があるのではないか。
- (9) グローバル人材の育成が高等教育共通の課題となっており、多くの本学学生の受入れ先である企業においてグローバルな事業展開が常態化する中、それを担う人材をどう育成するか、その取り組みが報告書からは十分に分からない。英語教育の更なる充実を含めて、グローバル人材育成事業の成果に期待したい。
- (10) 本学に限らず、学科ごと教員ごとに、教育の質の確保・向上に向けた取り組みに温度差があり、新たな取り組みを始めるほど特定の教員の負担が増し、全体の底上げは必ずしも十分に行われないといった状況が生じる傾向がある。大学・学部・学科の役割・責任分担を明確化しつつ、教員と職員間の分担・連携関係を見直しながら、戦略的かつシステムティックに教育改革を展開する必要がある。

第3章 学生の受け入れ

- (1) 大学として求める人材像を明確にするとともに、学部・研究科ごとにアドミッション、ディプロマ、カリキュラムの3つのポリシーを明確化している。
- (2) 学士課程は多くの志願者を獲得しており、一般入試とセンター試験で選抜された学生が70%を超えている。また、全国から学生が集まっており、全国型の大学として高い評価を得ていることを示している。
- (3) その一方で、別添資料に示されているように、近年退学者が急増している点が気になる。退学の理由については特定するのが困難なくらいに多岐にわたっているが、まずは大宮キャンパスでの学生受け入れ体制を整備すべきではなかろうか。新入生歓迎行事は各学科任せになっているように見受けられるが、語学のクラス担任制、一斉行事の開催など、学生が友人や仲間を見つけ、本学にソフトラディングできるような仕組みを用意することが重要。
- (4) 大学院の志願者数は、大学院教育の質という観点から考えると十分な水準にあるとはいえず、理工学研究科の博士後期課程と工学マネジメント研究科は定員割れ状態が続いている。理工学研究科も他大学出身者が少ないなど、大学院の志願者獲得が大きな課題となっている。
- (5) 留学生数が大学院を含めて全学生数の1%にとどまっているのは、「世界に学び、世界に貢献する理工学人材育成」の拠点として不十分であり、受け入れ留学生3%、240人を目指すグローバルSIT作戦の成果に期待したい。
- (6) 大学全体として社会人学生が少なく、社会人教育の重要性や社会人が学びやすい恵まれた立地などを考えると、大学院を中心として社会人の教育ニーズの掘り起こしに注力する必要がある。
- (7) 高校への働きかけをもっと行っても良い。理系の女性も増えているので、女性に優しい大学であることを積極的にアピールしてはどうか。女子学生の受け入れ拡大のためにはハラスメント対策など、リスクマネジメントの体制づくりが欠かせない。

第4章 学生支援

- (1) 厳しい就職状況が続く中、「就職に強い大学」との評価が定着していることは大きな強みであり、就職率も堅調に推移している。そのような中で、就職支援に対する学生の満足度が低いという点をどう理解すべきか、学内で認識を共有化し、何らかの措置を講じる必要があるれば速やかに検討いただきたい。なお、報告書付随のデータ集では、卒業後の進路状況が大まかにしか示されておらず、学部・学科別の状況、進学率の明記、その他の内訳の明確化などをお願いしたい。
- (2) 留学生の受け入れの増大に対して意欲的な数値目標を掲げた点を評価したい。特に、大宮キャンパス内に国際学生寮を建設することについては高く評価したい。一方で、理工系では難しいかもしれないが、学生の海外留学の道が開かれていないように見え

る。大学の国際化は一方向の関係でなく、双方向の関係を意味するので、受け入れと送り出しの両方の対策を講じることが大切。

- (3) リケジョ（理系女子）という言葉があるように、理工系の大学・学部に女子学生が多く進学する時代といわれている中、各大学はハード・ソフト両面での体制整備を進めていると聞く。報告書からは、本学の取り組みが見えないが、女子学生の支援体制については引き続き整備を進めてほしい。
- (4) 障がいをもつ学生に対する全学的な支援体制の基盤作りを進めており、2012年度の講習会を受講したノートテイクが全学で58名にのぼることは評価できる。
- (5) 学生の相談件数は年を追って増加し、その内容も多岐にわたっている。2011年度に「学生・教職員健康相談室」が設置され、2012年度においては同相談室にベテラン専任職員を配置し、ネットワーク強化が図られているが、保健師、心理カウンセラー、ケースワーカーなど、教員と職員の間位置する専門職の配置が今後さらに必要になると思われる、長期的視点に立った計画的な配置を検討する必要がある。悩みがあるが相談できる日まで順番待ちしなければならないといった状況はないかなども点検しつつ、他大学の取り組みなども参考に、引き続き体制やシステムの整備に取り組んでほしい。
- (6) 学生が安心して学業を継続できることを目的に、2種類の保険制度と数種類の奨学金制度からなる「芝浦工業大学学生総合保障制度（SAFEシステム）」を整備していることは評価できる。一方で、全国的に所得水準が低下する傾向が続いており、地方から首都圏への進学、私立大学への進学、学費の高い理系学部への進学などは経済的にさらに厳しさを増す可能性があることから、学費水準や学費免除・奨学金制度の在り方など、長期的視点で十分な検討を行っておく必要がある。

第5章 内部質保証

- (1) 法人と大学の両方で評価体制を整えるとともに、チャレンジSIT-90作戦に基づき、意欲的な取り組みを行っており、PDCAサイクルを確実に回すべく、大学、3学部、2研究科それぞれにおいて定期的に点検・評価を行っている。引き続き、理工系大学に相応しい、質を数値化し、可視化できる仕組みを考案し、実用化につなげてほしい。
- (2) ディプロマ・カリキュラム・アドミッションの3つのポリシー、特に、教育目標「社会に学び社会に貢献する技術者」達成に必要な具体的学士力を示す定量的アウトカムズの設定とその卒業時の達成保証、その評価インフラとしての電子ポートフォリオシステム（学生自己開発認識システム）の導入による、教育プログラムのPDCA化・見える化などは注目に値するが、このようなフローを構成することが、学科間の壁を高め、履修と人材育成の硬直化、入学学生の資質や素養の狭隘化をもたらす可能性もあることに留意いただきたい。教育の質は教員の質によるところ大であり、それを向上させるための持続的な取り組みが必要である。

- (3) 文部科学省平成 22 年度大学教育推進プログラムに採択された「PDCA 化と IR 体制による教育の質保証」が具体的にどのように展開されているのかについて、既に 3 年を経過しているので、点検・評価し、その結果を明らかにしていただきたい。
- (4) 既に述べたことの繰り返しになるが、自己点検・評価報告書を読む限り、同じ内容の記述が繰り返される、学部や研究科ごとに精粗がある、資料番号が付されているが資料が添付されていないため内容が不明、数値など客観データが少ない、など、報告書としての工夫の余地は大きいことから、来年度の報告書における改善に期待したい。

おわりに

多くの大学が、入口である志願者確保と出口である就職の両面で厳しい状況に置かれている中、本学は志願者数、就職率とも堅調に推移している。その背景には、建学以来積み重ねてきた実績と伝統、それに基づく受験生・保護者、高校、企業をはじめとする社会からの確かな評価と信頼があり、さらに、高い目標を掲げて新たなことに挑戦し続ける姿勢も、これらの成果を後押ししているものと考えられる。

その上で、既に述べたことの繰り返しにもなるが、3つのことを述べておきたい。

一つめは、本学が持つポテンシャルや本学が立つポジションをまだ十分に活かしきれていないという点である。女子学生の増加、留学生の受け入れと留学派遣の増加、社会人への修学機会のさらなる提供など、本学が果たす役割は大きく、その役割を果たすことで我が国の高等教育におけるプレゼンスをさらに高めることもできるはずである。

二つめは、グローバル化が急速に進む社会における理工系総合大学の新たな姿を追求し、先頭を切ってその姿を示していただきたいという期待である。例えば、グローバル競争が激化する中で求められる理工系人材とは何か、多様性を尊重し、多様であることを活かす社会や組織で活躍する人材をどう育てるべきか、理工系総合大学としていかなる知を追求すべきかなど、深く考え、大きな構想を示しながら、実現に向けて着実に取り組んでいくべき課題は多い。

三つめは、大学・学部・学科、大学・研究科・専攻など、それぞれの組織とその長の役割や責任を明確にし、大学として大きな方向性や目標を共有しながら、それぞれが自律的にその責務を果たしていく中で、教育研究の高度化が実現できる、そのような仕組みと運営を目指していただきたいということである。そのためには、教員と職員がそれぞれの役割を尊重しながら、適切に分担・協力し、種々の課題に取り組んでいく必要がある。それらが着実に実施され、成果につながっているかを確認するのが、自己点検・評価である。

新たな年度がスタートして既に 2 ヶ月が経過しようとしているが、今年度、本学がさらなる前進を遂げることを期待して、24 年度評価の総括としたい。

以 上